

第2編

石田頼房先生から
手渡されたもの、
次世代へ手渡すもの

石田頼房先生から手渡されたもの、次世代へ手渡すもの

石田頼房先生は1960年から1995年までの35年間にわたり、東京都立大学で研究教育に尽力された。私たちは先生の教えから得たものを糧として、社会に出て様々な立場から都市計画の実践に関わってきた。先生から手渡されたものを改めて振り返り、感謝するとともに、私たちの手の中にある言葉を見つめ直し、次の世代へ手渡すことを考えてみた。

まず、先生の教えを振り返るため、「キーワード+関連プロジェクト」という形で寄稿を募った。並行して、先生が計画に関わられた4地区を選び、現地を訪問した。これらの総括として、ワークショップを開催して、今後活かすものを議論した。

第2編は、そうした教え子たちの半年間の活動の成果である。活動は、TMU都市と住宅を考える会(東京都立大学・首都大学東京出身で都市・住宅・設計関連業務に携わる卒業生有志の集まり)が中心となつて、広く教え子に呼びかけて実施した。具体的構成は次のとおりである。

I 寄稿集「石田頼房先生から手渡されたもの、次世代へ手渡すもの」

東京都立大学出身の教え子を対象として寄稿を募った。あらかじめ項目・書式を統一し、先生から教えられたこと(在学中および卒業後)の中で特に印象深いこと、大切だと思うことをキーワードで表現するとともに、関連する具体的なプロジェクト等を紹介する内容とした。2016年4月から7月まで原稿を募集し、38名から45編が寄せられた。

キーワード集としたのは、先生の教えをわかりやすく次世代へ伝えるためであり、プロジェクトを併記したのは、都市計画の具体的な実践と結びつけるためである。一つ一つ重みのあるキーワードやプロジェクトばかりであるが、そこにはいくつかの通底する考え方が浮かび上がってきた。

(1) 寄稿にみる石田先生の教え

寄せられた45のキーワードを「計画するための原則(理念)」「実践するための手法(制度)」「実現すべき空間(都市像)」「中心となる主体(当事者)」の4つのカテゴリーに分類し、解説した。複数のカテゴリーに関連するキーワードも多いが、主要と考えられる分野に注目して整理した。

(2) キーワードによる寄稿集

上記の分類に沿って45編の寄稿を整理し掲載した。各編とも、一人一人の先生への想いととも、先生の教えが現実の社会で結実している軌跡を実感できる。卒業後、長い時間が経過して記憶が正確でない部分もあろうかと思うし、各人のかけがえのない関わり方が所定の様式に収まりきれずに統一感を欠く場合もあろうが、どうかお許しいただきたい。

II 報告集「石田頼房先生の計画地区の今を歩く」

先生が計画に深く関わられて実現した4つの代表的な地区を選び、2016年4月から7月にかけて現地を訪問した。石田先生の計画理念は何か、それはどう実現しているか、今後の課題は何かについて、今日的視点から踏査し考察した。そして、参加者からのレポートを取りまとめ、私たちの報告とした。

- ①東京都武蔵野市・吉祥寺駅北口都市改造(2016年4月23日、25名参加)
- ②東京都立川市・立川駅南口土地区画整理(2016年5月15日、26名参加)
- ③秋田県大潟村・八郎潟干拓地農村整備(2016年7月15日、18名参加)
- ④山形県小国町・山村集落移転団地整備(2016年7月16日、18名参加)

①②の訪問に先立ち、石田先生が整理保管されていた資料(石田資料)を精査し、計画に対する先生

の考え方や関わり方の究明に努めた。また、③④の訪問に当たり、石田先生とともに計画に関わられた木村儀一先生(明治大学元教授)には、事前の企画調整から現地での講演解説まで大変お世話になった。さらに、大瀧村元村長の宮田正植氏、小国町副町長の山口政幸氏はじめ地元関係者の多大な協力をいただいた。ご厚意に深く感謝したい。

Ⅲ 論 点「石田頼房先生の教えから次世代につなぐもの」

原稿募集および計画地訪問を踏まえ、先生の教えを今日的視点から振り返り今後を考えるために、教え子が集まってワークショップを開催した(2016年7月30日、19名参加)。また、教え子それぞれの実践から見えてくるものを考察した。

(1) 教え子たちによるワークショップの成果

分類されたキーワード群を手掛かりに「理念」「制度」「都市像」「当事者」の4つのテーマ別に、今後の都市計画の主要課題に対する方策を議論した。その主要論点を未来に対する私たちの問題認識の形で取りまとめた。

(2) 教え子に渡された実践のサイクル

寄稿全体および計画地区から見えてくる先生の教えや考えを考察すると、都市計画の実践者としての石田先生像が明らかになった。そして、私たちがそれぞれの立場で都市計画を実践する構図を循環サイクルの形で見出すことができた。これを「教え子に渡された実践のサイクル」として提示した。

教え子による寄稿からは先生の教育者としての姿をうかがうことができるし、計画地区を歩いた報告からは先生の計画者としての考えを感じ取ることができる。そして、教え子が社会での実践を経て振り返り、いま次の世代に伝えたいことが明らかになりつつある。

石田先生は「計画とは何か」をつねに考えられていたように思う。そして、計画というものに対する強い希望とゆるぎない信頼を持たれていた。それは人間の理性と精神に対する深い敬意に立脚したものである。先生から多くのことを手渡された私たちは、今度はそれを次の世代へ手渡していかなければならない。私たちの想いを読み取っていただければ幸いである。

2016年8月

TMU都市と住宅を考える会代表 大竹 亮